

● われわれにとって

西洋文学とはなにか

● 西洋文学はどう歩んできたか

● 現代の西洋文学は

なにを問題にしているか

● 西洋文学と日本文学の出会い

中村善也編

世界思想社

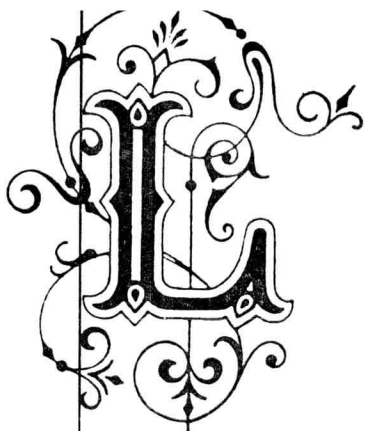


西洋文学を学ぶ人のために

西洋文学を学ぶ人のために

中村善也編

世界思想社



編者紹介

- 1925年 福井県に生まれる
1949年 京都大学文学部卒業、西洋古典文学専攻
現在、京都府立大学文学部教授

西洋文学を学ぶ人のために

定価 880円

1973年 6月20日 初版第1刷発行
1974年 4月20日 初版第2刷発行

検 印 廃 止

編 者	なかむら ぜんや 中 村 善 也
発行者	高 島 国 男
印刷者	内 本 睦 夫

世界思想社

本 社 京都市 北区 紫竹東栗栖町 42 番地
電話代表(491)4131 振替京都2908
東京支社 東京都千代田区神田神保町 3-19
電話 (261) 1900

©1973 中村善也 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

(弘栄印刷・藤沢製本)

1390-082114-3868

まえがき

この書物は、将来西洋文学のどれかの部門を専攻しようとしている人たちへの準備的な手引きとなるとともに、また「教養」として西洋文学に親しんでいる人たちにも必要な知識を与えることを目的として編まれたものである。

この二つの目的は、考え方によつては両立しないものであるかもしれないが、文学というものゝが医学や工学や法学などとはちがつて、専門的知識をもたなければ近づきえないというものではないかぎり、十分に両立しうるものとも考えられる。「西洋文学を学ぶ人のために」という題名自体が、そういう意味では編者にも多少の抵抗を感じさせたが、そういうシリーズの一冊であるということで、あまり気にかけないことにしている。

なお、各項目の終わりに付された「関係文献」のリストが邦文のものだけに限られているのも、あまりにも「専門的」であることを避けたからである。

西洋文学の、あるいは広く文学の、入門書といふべき書物は、もちろん、すでに多くのものが存在しており、そのそれぞれが存在理由を持つているであろうが、この書物は、単に文学史的な記述や文学概論ふうのものに終わらず、幾つかの重要な視点から西洋文学を見直してみようと試みたものである。そして、西洋文学の源流であるギリシア・ローマ文学についての知識を伝えようとするにかなりの比重を置いたこと、同時に、われわれがそのなかで生きている現代の文学がどういふものであるかを積極的に取り上げたこと、そして、西洋

文学が日本文学に何を与えたかという問題を重視したこと——この三点が、類書に見られない本書の特色となるであらう。

このささやかな書物も、編者の年来の知友や先輩の協力がなければ、出来上がらなかったであらう。すすんで編者を助けてくださった執筆者たちにあらためて感謝するとともに、この書物の出版にあたって種々お骨折りをいただいた世界思想社編集部の駒城鎮一、黒瀬勝巳の両氏に謝意を表したい。

一九七三年四月

中 村 善 也

目次

まえがき

I われわれにとって西洋文学とはなにか

森 稲垣 清
中 村 善 弘
村 善 也中 村 善 也
高 木 久 雄
十 川 信 介

西洋文学との出会い 3

西洋文学の魅力 6

西洋語の文章 9

西洋文学と宗教性 12

西洋の風土 15

理解のパーセンテージ 18

西洋文学の本質 22

明治の西洋文学 27

現代の課題 33

Ⅱ 西洋文学はどう歩んできたか

西洋文学の源流——ギリシア・ローマ文学

中村善也

はじめに 39

1 「叙事詩」世界の推移 40

2 「抒情詩」の盛衰 54

3 「悲劇」と「喜劇」と「新しい劇」と 67

4 「小説」の成長 78

古典主義からロマン主義へ

高木久雄

——主としてドイツ——

1 古典主義とはなにか 87

2 ゲーテの古典主義 93

3 ドイツ・ロマン主義 102

写実主義、自然主義、象徴主義

稲垣定弘

——十九世紀のフランス文学——

1 ロマン主義から写実主義へ 110

Ⅲ

現代の西洋文学はなにを問題にしているか

戦いと抵抗

——スペイン戦争とオーデン・グループ——

森 清

「実存」の文学

——サルトルの『壁』を中心に——

稲垣定弘

2	バルザックとスタンダール	114
3	写実主義から自然主義へ	120
4	自然主義とゾラ	125
5	象徴主義	129
1	序章——義勇兵は征く	143
2	作家たちの態度	145
3	オーデンのばあい	148
4	スペンダーの『静かなる中心』	156
5	デイ・ルイスとマクニース	162
6	むすび	167
1	実存主義の登場	170

2	『壁』をめぐる	174
3	三人の人物	180
4	『嘔吐』について	188

疎外と人間

高木久雄

——カフカの場合——

1	文学の主題としての疎外	193
2	現代における人間疎外の意識	196
3	カフカの作品における疎外の問題	200
4	カフカの幻想の世界	207

モラルからの解放

白田 昭

——D・H・ロレンスの意味——

1	宗教的「道徳」と社会的「道徳」	216
2	「解放」への試み——ハーディとコンラッド	220
3	真実の人間——ウルフとロレンス	227
4	ロレンスの世界	233

方法の探究

稲垣定弘

——ジイド、ブルースト、ダダとシュールレアリスム——

はじめに

241

1 ジイド

243

2 ブルースト

248

3 ダダとシュールレアリスム

256

アメリカ・アメリカ

古川弘之

——現代アメリカの社会と文学——

1 第一次大戦前後

269

2 不況の時代から第二次大戦へ

277

3 第二次大戦以後

284

IV 西洋文学と日本文学の出会い

西洋文学と日本文学の出会

十川信介

——近代日本文学の成立期を中心に——

索 引

1	文明開化		293
2	坪内逍遙		303
3	二葉亭四迷		310
4	森鷗外		319

I

われわれにとって西洋文学とはなにか

(司会)

中村	十川	稲垣	高木	森
善也	信介	定弘	久雄	清

西洋文学との出会い

中村

われわれにとって西洋文学とはどういうものなのか、われわれに對してどういう意味とかかわりあいを持ち、そしてそれをどういうふうなものとして受けとめればよいのか——そういうことを検討したいと思うわけですけれども、まず最初の手がかりとして、西洋文学におけるなにがわれわれをひきつけるのか、つまりわれわれが一応の読書年齢に達したとき、われわれ自身の文学以外に西洋の文学を読むようになるのはどういう魅力によってなのか、そういうところから話を始めていきたいと思ひます。

そこで、最初に、僭越ですが僕自身の経験を申しますと、中学（旧制）時代には、いなかの中学でもあり、家庭の知的な雰囲気という点からいいましても、これといって西洋の文学に親しむほどの機会がなく、ほんの断片的に、たまたま手に触れたものを読むというぐらいのもので、ほんとうに西洋の文学に接したというのはやはり高等学校（旧制）時代からだと思ひますが、つき合っていた友だちの影響もあって、いきなりドストイェフスキーにぶつかりました。いまから思うと、ある意味では感心もするのですが、これはほとんど全作品を読みました。要は、あそこにある悪だとか、罪だとか、革命だとか、まあそういうのはなばなしの觀念が、よくわかりもしないのに、あるいはわからないがゆえにかえって、魅力になったのだと思ひます。それと、人間というか、人間の心理というか、そういうものへの関心と洞察、それにもひかれたように思ひます。それから、バルザックを読みました。これも、同じリアリズムの小説だとはいっても、フロベールやゾラなどとは違つたあくの強さと、一種の觀念性があり、どこかにドストイェフスキーと共通したものがあるように思ひますが、要するに、どちらも、日本の文

学のどこか淡泊な味とはちがつた濃厚さというか、烈しさというか、そんなものがある点で似ているように思われます。——けっきょく、バルザックからは西洋の小説というものの面白さを、ドストイェフスキーからは西洋文学というもののすごさを知った、とでもいうことになるようです。いまから振り返ってそんなふうに思えるのですが、だいたい僕と同じ年代の高木さんはいかがでしょうか。

高木 そうですね、中村さんとは年代も近いから、まあ同じようなものですが、ぼくの場合には、ドストイェフスキーも読みましたが、ニーチェを——これはむしろ思想家というべきかもしれませんが——ともかくニーチェを大いに読んで、非常に強烈というか、生に対してなにか淡く疎遠のような感じの日本人とはちがつて、まともに戦うというか、あくどいというか、生と四つに組むといったところが魅力的でしたね。それから、なにか非常に大きい面があつて、ぼくたちがいなかの中学とか、あるいは非常に狭い環境の中で、ともかく日本的な教育を受けてきて、そこから急に大きく外へ出て行くみたいな、そういう大きなひろがりというか、いままでの殻を破って出て行くというような、そんなものを強く感じました。ぼくたちが中学の頃までに植えつけられてきた仏教的な世界観、つまり諸行無常の悟り、もののあわれの認識というようなものと、身を修めることを主眼とする儒教的な教えに対して、生の悦びと精神の高揚をたたえる思想的な冒険とでもいったものがそこにはあり、それにひきつけられたように思うのです。もちろん、旧制高校時代の、あまりわかりもせずになにかにかれちゃうような、そんな要素もあつたと思いますけれど、やはり思想的に冒険をしてやろうというような気持もあつたんじゃないかということをいま思い出しているんです。

中村 やはり、似たようなものですね。

高木 ええ、そう思います。

中村 われわれ、同じ年代の高木さんと僕の場合は、ほとんど似たり寄ったりなものだったと思われるのですが、ちょっと一時代前の、森先生はどうでしょうか。

森 そうですね。これは、時代的なものよりも、個人個人によってだいぶ違うんじゃないかとも思うんですが……。ともかく、あとから振り返って考えてみますと、いろいろ理屈がつけられるわけでしょうけれども、わたし自身の場合は、もつとなにか本能的なものだったような気がしてなんなのです。自分の国以外のもの、西洋のものに目を向けるというそういうなにか非常に本能的な、ある意味では衝動的なものがあったように思えてなんなのですけれど、ともかくそういうことで、始めからこれという理由や目的がなくて、なんということなしにそういうものに親しむようになったというのがほんとうではないかと思います。それと、旧制高校で非常に重視された外国語という、これは新しい武器みたいなものですが、それとの関連で、自分の未知の分野を開拓していこう、あるいは見知らぬ世界の扉を開いてみようという、そういう好奇心みたいなものが実はあったんじゃないかと思うわけです。まあ、「のぞき見」というとなんですけど、そういうものが始まりだったように思われてなんなのです。

で、そういうふうにして、だいたい扉が開かれたような感じがするわけですが、ちょうどわたしは、中村、高木両先生より十年ばかり前の年代で、それは日本の激動期でもあったわけです。思想的には一種の混乱時代——そういった時代で、まあ、自分はどういうふうにして生きて行くかということが、これはむしろ明治・大正の書生の名残りみたいなものかもしれません、そういうことがかなり現実に重要な問題になっていたような気がするのです。したがって、あるいは衝動的に、あるいは本能的に開かれた門戸から入って来ましたものが、今日から考えてみますとかなり片寄ったものであったようにも思われるのです。だいたいが十九世紀の、ある意味では今日なおいろんな問題をもっている、そういう小

説を、あるいは作品を読む、そしてけっきょく、むしろ文学作品としてよりは、自分がいかに生きるかということの指針みたいなものをそこから得ようとしていた、そんなふうに思われてならんです。いまの答えになっているかどうかわかりませんが、だいたいそんなところですよ。

西洋文学の魅力

中村 本能的な好奇心というものがあつたということが一つと、それとやはり、人生いかに生きるべきかというようなことへの関心があつたのではないかというようにお聞きいたしましたけれども……。ところで、年代にこだわるようですけど、稲垣さんは僕よりもだいたいぶ年下で……。

稲垣 いや、そうでもないでしょう。わたしは、中学時代がまさに戦争の時期でしたから、それほど違わないんじゃないかと思うんですけど。

で、わたしに関して言いますと、西洋文学がどうこうという以前に、文学に対するわたしの興味を培っていたものとして、日本の古典の占める部分が非常に多かったと思うのです。それは、いま言いましたように戦争中であつたということに関係があるわけでしょうけれど、たとえば中学時代の国語の時間に、『徒然草』の一章を教えられたとしますと、よし、『徒然草』を全部読んでみてやろうとか、あるいは『枕草子』の場合だって同じことですが、そんなふうにして食い付いていったというのが、わたしの文学との接触の出だしだったように思います。それと、もう一つやはり、いまに思うとおかしいんですけど、はじめ中学時代には漢学者になろうと思っていましてね。つまり、それほど圧倒的に漢